文芸読本

中原中也

文芸読本　中原中也　©1976

初版発行　昭和五十一年十一月十五日
四版発行　昭和五十二年七月十五日

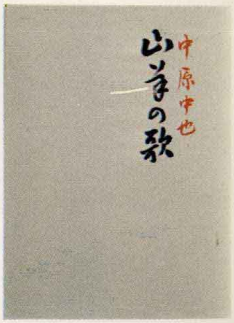
定価　六八〇円
0091-037644-0961
落丁・本乱丁・本はお取りかえいたします

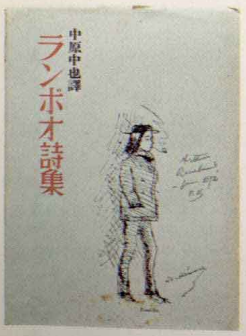
発行者　佐藤皓三
発行所　株式会社　河出書房新社
〒162　東京都新宿区住吉町九五
電話　東京（三五五）五三一一
振替　東京〇一一〇八〇二

印刷　東洋印刷株式会社
製本　和田製本工業株式会社

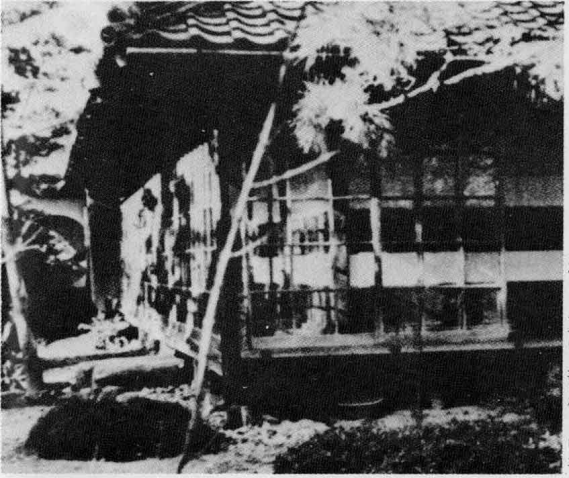
中原中也アルバム

18歳頃

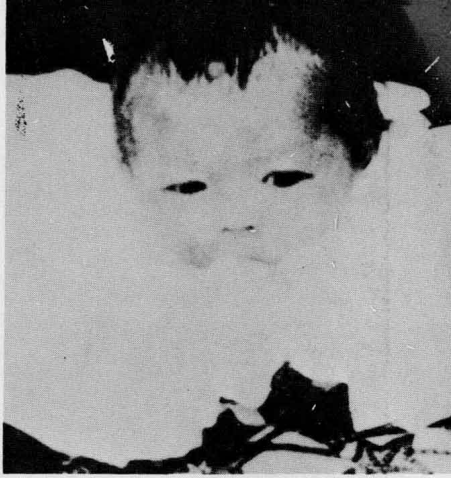




初版本と同人誌「白痴群」



生家。手前の部屋で出生



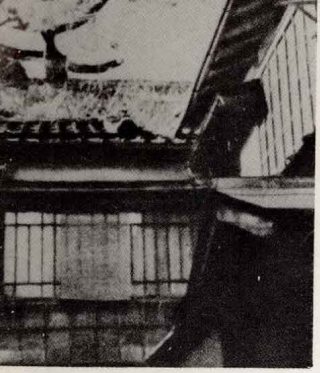
生後20日。明治40年、山口市湯田温泉に生れる

4歳、広島で

2歳、父と。軍医だった父の転任と共に広島へ移転

5歳頃、弟・亜郎(左)と

4歳頃、弟・亜郎(右)と



金沢の家。子供へのしつけは厳しく、この松の木に吊り下げられたこともある

大正元年金沢に移り2年間を過ごす。前列左から中也・亜郎・祖母・母・後列左父

大正9年、途中で転校した山口師範附属小学校卒業の日

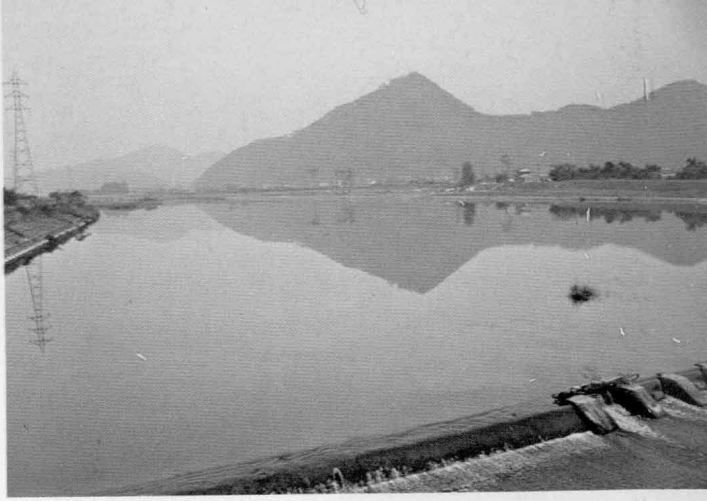
大正3年山口に帰る。湯田の下宇野令小学校入学の日

当時の家族 。前列左から思郎・ 呉郎・中也・恰三。二列めコマ・拾郎・祖父・父・母・祖母。三列め 看護婦。 後列車夫・女中

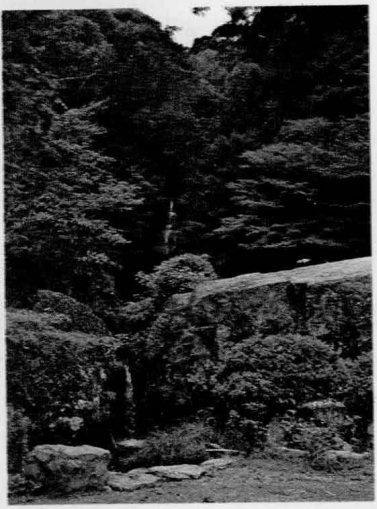
山口中学3年の頃、右端。大正12年、中学第三学年を落第

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

生家茶室(ランボオ詩集を訳した)



椹野川・秋穂渡瀬橋付近



少年時に遊んだ鼓ノ滝

詩人中也の故郷・山口

下宇野令小学校跡

吉敷・墓所を望む

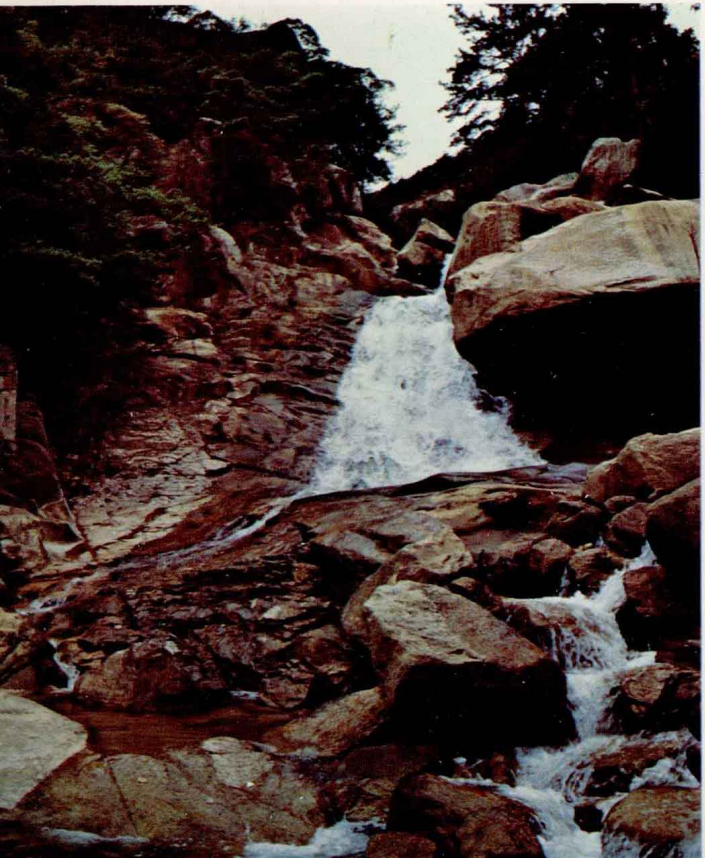
「一つのメルヘン」の舞台・吉敷川

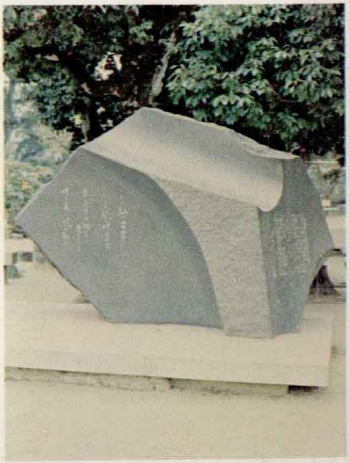
カトリック墓地のキリスト像

ザビエル記念碑

湯田温泉駅

中原家が親しくしていた泰雲寺裏にある鳴滝



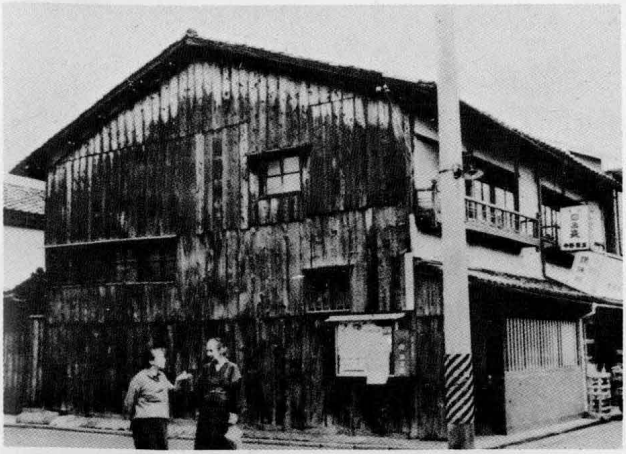


井上公園の詩碑

立命館中学3年修了時。18歳

大正12年京都立命館中学へ編入。右は家庭教師

長谷川泰子。(17歳)。大正14年共に上京



同棲していた京都の下宿二階(当時のまま)

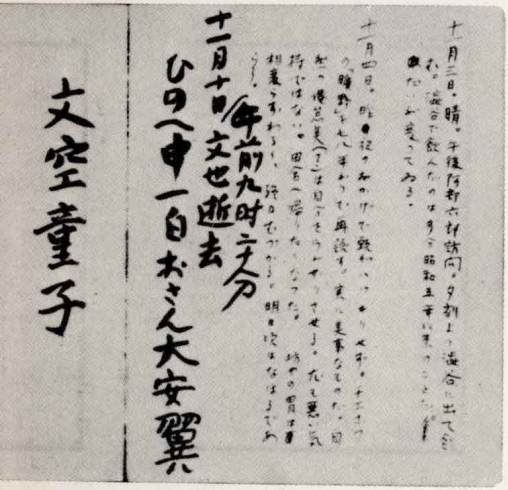
昭和6年弟恰三死す。作品「亡弟」に描く

東京外語専修科時代(25歳〜27歳)。前列左端

昭和8年27歳、遠縁にあたる上野孝子と結婚

昭和10年29歳、長男文也と遊ぶ

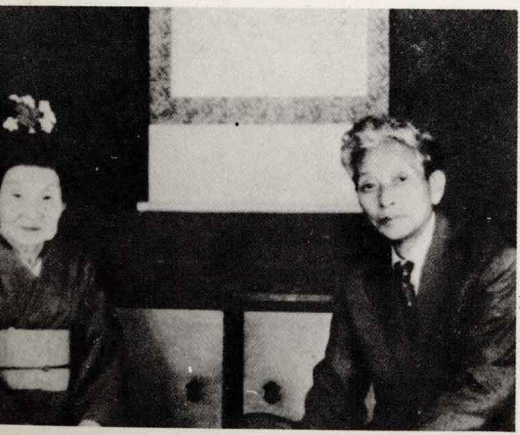
昭和11年十一月、文也急死。死の影の見える文也



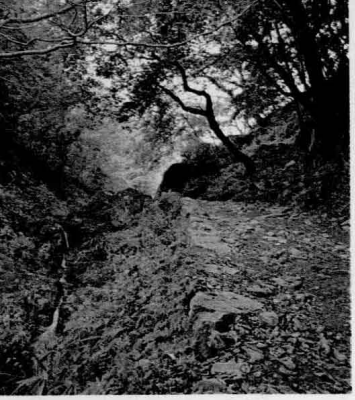
十一月十日 午前九時 文也逝去
ひのへ申一白おさん大安翼
文空童子

同日、文也の死を記した日記。神経衰弱昂じる

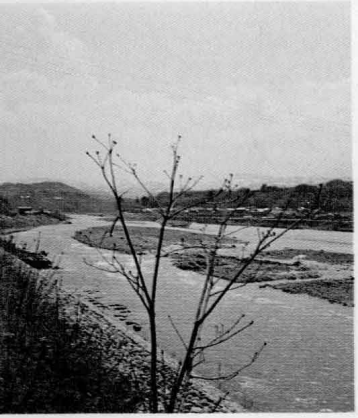
昭和11年30歳、死の前年の中也。



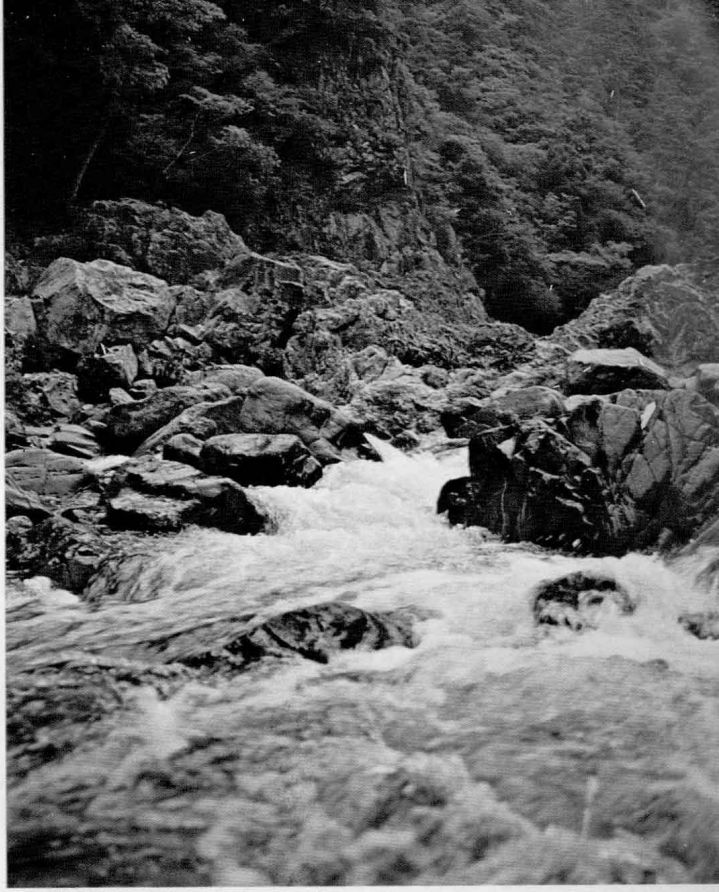
昭和42年中原家を訪れた小林秀雄と母フク



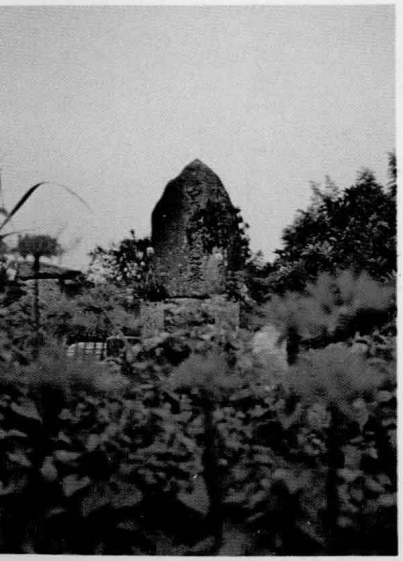
キリシタン殉教の地・津和野乙女峠



一時期暮した金沢の犀川ほとり



長門峡

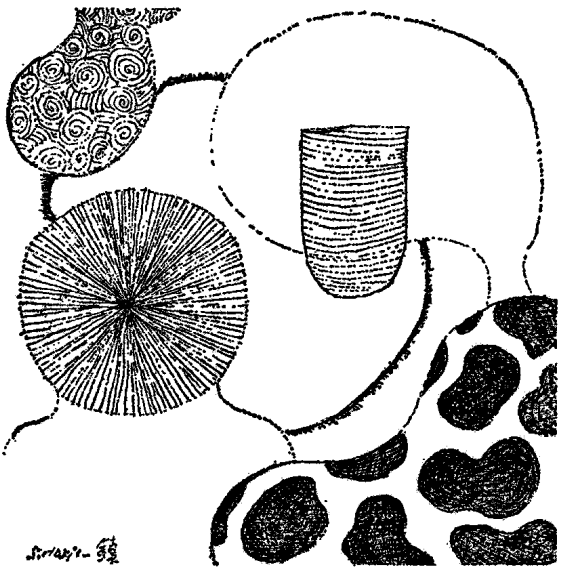


中原家累代之墓

鎌倉寿福寺裏の最期の家と門標

文芸読本

中原中也



河出書房新社

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

中原中也伝——揺籃

大岡昇平

昭和二十二年一月の或る朝、私は山口線湯田の駅に降りた。小郡で満員の山陽線を捨て、支線の列車が緩やかに椹野川の小さな谷に入って行くにつれ、私は名状しがたい歓喜を覚えた。それは不眠に疲れた私の眼に、窓外の朝の光の中を移る美しい谷間の景色の与える効果であったか、それとも亡友中原中也の故郷の家を見るのが、あと一時間に迫ったという期待から来る興奮であったか、私にはわからなかった。

私がこれから訪ねようとする家は、この友が生きていた間は訪れようとはしなかった家である。東京から山口までの距離は別としても、中原と私との交友は、そもそも互いに過去を気にかけるという性質のものではなかった。我々は二十歳の頃東京で識り合った文学上の友達であった。我々はもっぱら未来をいかに生き、いかに書くかを論じていた。そして最後に私が彼に反いたのは、彼が私に自分と同じように不幸になれと命じたからであった。

私も私で忙しいことがあるつもりであった。もっとも何のために忙しいか、中原が何のために自分が不幸であるかを知っていたほどには知らなかったのであるが——そして彼の死後十年たった今日、私に彼の不幸の詳細を知りたいという願いを起させ、私をこうして本州の西の涯まで駆るものが何であるか、それも私はよくは知らないのである。

しかし私も四十をすぎて、自分を知らないことがあまり気にかからなくなった。例えば前線で死に直面しながら、私は絶えず呟いた。「未だ生を知らず。いずくんぞ死を知らんや」。こういう不安定の心掛で、私が戦場をくぐり抜けて来られたとすれば、どうして現在平穏な市民生活をそれでやって行けないことがあろう。あとはすべて思想の贅沢である。

私の疑問は次のように要約されるであろう。——中原の不幸は果して人間という存在の根本的条件に根拠を持っているか。いい換えれば、人間は誰でも中原のように不幸にならなければならないものであるか。おそらく答えは否定的であろうが、それなら彼の不幸な

詩が、今日これほど人々の共感を喚び醒すのは何故であるか。しかし読者は私が急に結論を出すとは思わないで戴きたい。……

湯田は現在山口市に包括され、戸数五百を出ない小さな町である。微量の鉱分を含んだ温泉が湧き、隣接の旧山口市及び周防灘沿岸の工業都市から来る湯治客を待つ小遊興地を形づくっている。

駅前から人家疎らな畑中の道の二丁ばかり西へ行くと早くも温泉旅館の並ぶ一廓に突当る。通行人に訊くとすぐわかった。その一廓の右へ迂回して少し行ったところに、私は容易に中原病院の看板を見出すことができた。

中原家は中也の祖父の代からこの地に外科医を開業していた。昭和三年父君謙助氏の没後、長男中也に家業を継ぐ意志がなかったため、以来病院は他に貸していたが、私の行った時は次々弟呉郎君が成長して末弟拾郎君と共に経営に当っておられた。

病院は低い生垣の向うの前庭に疎らに庭木を配した、むしろ殺風景な木造平家の洋館である。これに中原病院ではなく「農事試験場」の看板が懸っていても私はさして驚かなかったであろう。それほどこの建物の正面は、普通の医院の入口の持つ威厳も愛嬌も具えていなかった。惟うにもと軍医であった父君謙助氏は、その医院を市民的虚飾で飾る必要を認められなかったのであろう。こうした投げやりな無雑作な外観も私には何となく中原にふさわしいように思われた。

出迎えられた医学士呉郎君の風貌も簡単な初対面の挨拶中、別に際立った印象がある筈がない。私はただ私の抱いている中原の幻影の奇怪さに比べて、こうしてかつて中原の踏んだ沓脱を単なる遠来の客として踏み、彼と血を同じくする人物と極めて平凡な会話を交えるのに幾分てれていたにすぎない。

しかしそれから広い縁側を伝って通された母屋の内部には、ちょっと私を驚かせた豊かさがあった。高い天井、大きな建具、その他普通「木口」と呼ばれる日本家屋の内部の一般的印象には、こうした田舎の古い家らしい目立たぬ豪奢があって、それは中原が東京で送っていたゆとりのない生活と奇妙な対照をなしていた。そういえば中原には何処か地主風の鷹揚さがあったのに、私は改めて思い当ったが、しかし私は彼の魂に固有かも知れぬ気高さを、環境を知ったばかりにそこから帰納したがる伝記作者の貪欲を戒めねばならぬ。

やがて六十五、六の小柄な美しい老婆が現われた。母福さんである。謙助氏の亡くなられた後、中也をはじめ四人の男子の教育を遂げられた苦心と緊張の名残は、その物静かな挙止にも窺われる。昭和十二年の秋中也の告別式の時、鎌倉でお目にかかり初対面ではなかったが、私はその顔を見忘れていた。

次弟思郎君はしかし憶えていた。お通夜の晩涙を払って便所から出て来られた姿が眼に残っていたからである。

「私共から見て、兄がこれほど皆さんに集まっていただくような人とは思われぬ」とその時いわれた。中原は東京生活のために中原家の現金財産をほとんど蕩尽していたのである。

思郎君は京大の法科を出られてから某工業会社に勤務せられていたが、任地京城で終戦に会い、今は妻子と共に郷里に帰っておられる。この人が中原家の当主である。

なお中原の次子愛雅(ちかまさ)は彼の死の翌年死亡、未亡人孝子さんも数年前再縁されて、現在中原家には中也の直接の遺族は、一人も残って

いない。

中也の写真が出された。告別式の時棺の前を飾り、創元社版『中原中也詩集』の巻頭に載せられた、あの無帽背広の半身像である。十年振りで見る中原の顔は、かつて棺の前で私を打ったと同じくらい強く私を打った。私の彼に対する考えは変った。

生涯を自分自身であるという一事に賭けてしまった人の姿がここにある。常にその決意と力の意識を通して、自己にも他にも向けていた厳しい眼を今撮影室の壁間に移し、諦念を以て世間の前に置き続けたと同じ姿勢を、そのままレンズに曝しているのである。

いかにも不幸な人であったが、この不幸は他の同情を拒んでいる。まして伝記作者の売文的同情なぞは——

あゝ　おまへはなにをして来たのだと……

私はかつて中原が故郷の風から聞いたと同じ声をこの写真から聞くように思った。私の青春に決定的な影響を与えたこの友に心で反いて以来幾年、たいていは穏やかでなかった我々の交友の記録に対する悔恨、或いはそのために無為と怠惰の裡に過ぎた歳月に対する悔恨なくしては、私はこの亡友の伝記の筆を取らなかったであろう。

中原家に厄介になった三日間、大袈裟にいえば私は一種の夢遊状態にあったといえよう。私は私の心を黙らせるために、できるだけ伝記作者の冷静と細心を課し、執拗に家族の方々に迫って、中也の生い立ちの詳細を問いただしたが、今手許のノートを見て、今更その内容の貧困と粗雑に驚いている。伝記作者としての私の未熟を別として、結局は私の中の感傷的原因から、私はただうかうかと彼の育った家の空気を吸ってすごしたにすぎなかったらしい。

例えば十五歳の中也が、所謂「思想匡正」のために九州の或る真宗の寺に遣られて帰ってからは、しばらくは廊下を歩く時も便所へ入る時も「なんまいだぶ、なんまいだぶ」を唱えていたという話を聞いてからは、私は廊下に絶えず彼の跫音（体重の関係で成人しても子供のようにひそやかだった彼の跫音）を聞くように思いながら、帰郷すると彼のいつも坐ったという奥八畳の間に坐り続けただけであった。

しかし、この最初の宗教的目醒めについて、中原自身はかなり違った話を私に伝えていた。彼によれば彼がこの寺にやられて得るところがあったのは、ただ親鸞の「ひとを千人殺してんや」という逆説を知っただけであった。彼がその時私に教えた親鸞の人と信仰に関する解釈は、家人の伝える素朴な熱狂とかなり逕庭があり、これもたしかに一問題であるが、たぶん私はこの郷里訪問記ではここまで触れることはできないであろう。

中原がこの寺に送られたのは、大正十一年中学三年の夏休みと冬休みの二回であった。当時彼の家に寄寓していた山口高校生村重某の紹介によったが、今家人は寺が大分県にあり、住職を「トウヨウエンジョウ」と呼んだというほか、所在地も寺号も忘れておられる。大正末期、キリスト教の複雑な教義に対抗するため、『歎異鈔』の新解釈を掲げた一派の道場ではなかったかと思われるが、今私は詳しく考える材料を持合せていない。

中原中也は明治四十年四月二十九日現在の中原家で生れた。謙助

氏三十二歳福さん二十九歳の最初の子である。当時謙助氏は旅順衛戍病院附軍医として任地にあり、同十一月福さんは夫に中也を見せるため海を渡る。

結婚後七年或いは子無きを憂えておられた矢先とて、両親の喜びは一方ではない。かつ幼少よりすこぶる利発の子であったので、その養育にもひとしお心を注がれた。そのため或いはああいう驕慢な子ができたのではないか、と母福さんは謙遜しておられる。一方中也は父が彼を愛するあまり、遊蕩的な湯田の環境を教育に悪いとして外で遊ぶことを禁じ、また溺死を懸念して水泳を習わせなかったこと等について父を怨んでいた。子に満足される教育を与えるということは、そもそも親という位置からは不可能らしい。

しかし中原はこの父について多く懐しさをもって語った。彼がよく話した一つの挿話があるが、それによると或る時父が病気で離室に寝ていた時、母屋で制止をきかずに弟と騒いでいる彼を、父は裸足で中庭の敷石伝いに叱りに来たが、その手には一枚のハンケチが握られていて、父はそれで子供たちを打って帰って行ったそうである。

彼によれば父の厳格さは内心の優しさを隠す仮面なのであった。

謙助氏は明治三十三年柏村氏から入って中原家の女婿となられた人である。山口県厚狭郡厚東村棚井の農家の産。年少にして東京に出、済生学舎を経て軍医学校に学び、軍医として各地を遍歴、少佐に昇ったが、大正六年依願予備役編入、中原家の家業を継がれた。和歌俳句に親しみ、また軍医学校在学当時校長であった森鷗外に私淑して、福知山連隊に勤務中、その地の新聞に短篇小説を掲載したことがあったそうである。

しかし晩年は中也が文学を好むを嫌って、極力これを阻止せんとされた。年と共に青春の夢を失ったか、その毒を知って子のそれに当らざらんことを期されたか、そのいずれかであろう。

中原は中也という名前は鷗外につけて貰ったものだと称していた。当時旅順にあった謙助氏が手紙をもってもとの校長に長男のために、名を乞うたということはあり得ないことではないが、母福さんは全然別の機縁を記憶しておられる。それは当時任地旅順の上官であった軍医大佐中村六也氏の名の頭と尾をとったというのである。中也鷗外命名説と比べて、これは遙かに現実的であり、かつ文字の由来が確実という強味がある。[1]

中原にはちょっと伝説を作る趣味があった。それは彼の自己愛の子供らしい現われとも見られるし、彼はまたいつも自分が他人に誤解されると信じていたから、毒を制するに毒をもってする風の韜晦の理由を持っていたかも知れない。例えば私は偶然中原姓が在原姓と共に古い家柄であることを知り、或る時彼に糺したところ、彼は諾いて二、三怪しげな歴史的な詳細を附け加えたが、その時の彼のいたずらそうな眼附からどうも怪しいと思っていたら、果してこれは出鱈目であった。中也の家がこの歴史的中原と何らかの関係があるのは全然不可能ではないが、現在彼の家に伝わっているところでは何ら積極的な根拠はない。

中也の家は元来湯田の西北二キロの吉敷村にあった毛利の閥族、通称吉敷毛利の臣である。中也の祖父の代はすでにその分家であるが、二人兄弟があった。兄助之は学を志し、家を弟政熊に譲って単身出京、刻苦して英語塾に学び、後横浜鉄道局に通訳として勤務したが、明治十九年病を得て三十七歳で没した。中原の母福さんはそ

の一人娘である。

政熊氏は後中原家の現在地に移って医を開業した。子がなかったので兄の遺児福さんを養い、更に謙助氏の才幹を見込んで婿養子とした。こうして中也の幼時には家に二人の祖母があった。即ち福さんの生母スエさんと政熊氏の妻こまさんである。

こまさんはカトリックの信者であった。中也は幼時よくこの祖母に連れられて山口の公教会へ行ったが、無神論者であった父がこれを嫌いしだいに足が遠のいた。後年中原がカトリックの教義に示した関心は、この幼年時の印象と関連があるかも知れないけれど、今私は多く考える材料を持たない。少なくとも中原はこのことについて特に語らなかった。なお当時山口の公教会にいたのは有名なビリオン師であり、昭和五年四月中原は旧師を奈良に訪れている。

弟呉郎君の解釈によれば、中也の性格は、農から出て立志した父の「荒い血」と、封建の臣として淘汰された母方の「静かな血」の混淆から成るものである。或いはそういうこともいえるであろう。

父謙助氏の写真はかなり沢山残されている。中原の顔立は明らかにこの父から多くを受けている。短頭、丸顔、横に広い大きな額、高い鼻、大きい少し不整形な口、殊にその眼は中也と同じく大きく、ややモノメニアックな光を帯びて輝く。

すべてその医師という職業から来る理智的な嘲笑的な或るもの、軍人精神と結合した出世した農民の持つ意志と力と意識、これらがたぶん中也に伝えられた「荒い血」をなすものであった。

しかも溺死を惧れて子に水泳を禁ずる、ここには世の常の親の愛情だけでは量り切れぬ、病的な想像力が認められる。

中原がこの父を愛していたことは前に書いた。それは普通血縁による動物的愛情を超えた一種の精神的な共感に達していたように思われる。

——竟に私は耕やさうとは思はない！
ちいつと茫然(ぼんやり)黄昏の中に立つて、
なんだか父親の映像が気になりだすと一歩二歩歩きだすばかりです

（「黄昏」）

このただ自己の力のみに頼って、封建的な中原家の大家族の女婿として、その自尊心を保持し続ける父の姿は、彼が十七の時断乎詩人たらんと志を立てて郷関を出て以来、幾度か彼を襲った意気沮喪の瞬間に、彼を力づける強い映像だったのではあるまいか。

昭和三年五月父が死んだ時、彼は帰省しなかった。これには彼が当時家へは大正十五年以来日本大学へ行っていることになっていたが、実は入学さえしていなかったので、母から着て帰るように指定された学生服を持っていなかったという実際的な理由があったのであるが、[3] 私は別に彼の父に対する感情の或る厳しいニュアンスを認めることができるように思う。「父が死んだからといって、子が葬式に帰らなければならないという理由はない」と彼は書いて来たそうである。彼はランボーに倣って「人でなし中也」と署名することもできたろう。

昭和十二年彼が東京の生活に行き詰りを感じ、しばらく妻子と共に郷里で暮すことにきめた頃、或る日彼は阿部六郎氏を訪ねた。話がたまたま亡父のことに及んで、突然中原は大粒の涙をハラハラと落したそうである。中原が父のことを語って落涙したのはこれがは

じめてで、阿部氏の印象に残った。

おそらく中原は今志を得ず郷里に帰らねばならぬ自分を、父に肖ざるものと感じたのではあるまいか。彼の詩人としての自覚にはこうした出世主義の入る余地は全然なかったのであるが、しかもなお彼が絶えず内心にこの種の刺戟を感じていなければならなかったとすれば、これ以上傷ましいことはない。

大正三年湯田の小学校に入るまで彼は父の転任に従って居所を変えた。まず明治四十年十一月旅順、四十二年三月広島、明治四十五年九月金沢、大正三年学齢に達して始めて父の任地に追随するを止めて、三月母弟と共に湯田に帰った（なお福さんは最初子が無かったにもかかわらず、中也から始めて六人の男子をあげられた。うち二人は夭折した）。同年四月下宇野令小学校へ入学、成績は抜群であった。

今私がこれを書いている室の壁には、今度中原家から戴いて帰った中也の字が掲げてある。それは彼の尋常四年の時の習字帳の一部で、「流早く水清し古き杉数千年」という文句であるが、私はこの幼稚ながら一種の正確さの現われている少年中原の筆跡に、彼がその不幸と混乱に満ちた生涯を通じて失わなかった健康な節度ある精神を窺うのが楽しい。習字は彼の種々な早熟な才能の中でも最も早く目醒めたものの一つであった。そして成年になってからも、彼の筆は堅苦しいほどきちんとした手本的な正確さを持っていて、それは彼の無雑作なボヘミアン風の生活態度と奇妙な対照をなしていた。

しかし彼は自分の字を自慢しなかった。書は俺の才能の中で一番進歩しないものだ、と常々思郎君にいっていたそうである。

これに反して奇妙なことであるが、作文は最も発達が遅かった。特に下手というほどではなかったが、他の学科において卓れているに比べて、これは長く一般の水準を出なかったらしい。

もしあの世というものがあって、中原が私が今こう書いているのを雲の間からでも見ているとしたら、彼はきっと「それは散文だからさ」というだろうと思う。

中原は散文は最後まで上達しなかった。彼が時たま新聞や雑誌に発表した散文には、彼の詩の整然たる節度と比べて、考えられないくらいのたどたどしさがあって、むろんそこには彼の人柄の一種の味が出てないことはなかったが、概して彼の抱懐した独創的な観念を、歪め傷つけ滑稽にするために筆をとっているとしか思えないものであった。明らかに彼は一生人と普通の交際ができなかったように、思想に最低限の一般的形態を与える技術ないし忍耐を持っていなかったのである。

しかし「詩なら来い」と彼はまたいうだろうと思う。『在りし日の歌』の後記に彼は書いている。「詩を作りさへすればそれで詩生活といふことが出来れば、私の詩生活は既に二十三年を経た」。彼がこれを書いた時は三十一歳であったから、つまり九歳に溯るわけである。

この年代は彼が昭和十一年に書いた「詩的履歴書」という年譜風の断片によって裏附けされる。それはまさに彼が数え年九歳であった大正四年から始まっているのである。

「大正四年の初め頃だつたか終り頃であつたか兎も角寒い朝、その年の正月に亡くなつた弟を歌つたのが抑々の最初である。学校の読本の、正行が御暇乞の所、『今一度天顔を拝し奉りて』とい

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com